

書評

Mave Salter 編著 前川厚子 訳

ボディ・イメージと看護

網本 和 (聖マリアンナ医科大学リハビリテーション部)

ボディ・イメージとは、あるいはその障害とは一体どのようにとらえられ、また我々リハビリテーションにかかわるものにどんな意味を投げかけているのだろうか。「ボディ・イメージと看護」はこのような問いかけに対して、きわめて広い視点から応えようとするものである。

本書は英国の Mave Salter 氏による「Alterd Body Image : The Nurse's Role」を、ボディ・イメージの変容に深くかかわるストーマケアで著名な前川氏が、氏のイラストを加えて訳出されたものである。

ボディ・イメージは実に様々な状況や疾病によって障害されることを、まずこの書は教えてくれる。すなわち、子供の発達変化、皮膚疾患、感覚障害、脳神経疾患、食行動障害、脊髄損傷、リウマチ、癌、熱傷、婦人科疾患、乳房切断、ストーマが扱われている。これらの障害や疾患の範囲は、まさにリハビリテーションの中核的領域とほとんど重なることに気づくだろう。

このような疾患によるボディ・イメージの変容への臨床的対応が記されており、例えば「脳障害による認知機能が低下している患者に対して、鏡を使用

すると混乱することがある」という興味深い指摘がみられる。

さらに本書での重要なキーワードは、スティグマとセクシュアリティである。スティグマとは、身体に異常をきたしたことによって、社会から低くみられる烙印のことであり、一方セクシュアリティとは、性的存在としての自己意識のことである。

スティグマを解消し、セクシュアリティを支えることにより、リハビリテーションにおける QOL を高めることができるのではないか。

この書が我々に喚起するものは、形態や機能の障害という「見えるもの」によって惹起される自分のイメージ、すなわち「見えないもの」の重要性であり、潜在化された患者のボディ・イメージへ向かうとする、まさに我々のイメージであるといえよう。

「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に続くからです」(「コリント人への手紙 第2」4章18節)

(A5版 266頁 3,605円(税込) 1992年 医学書院刊)